

中華民国期の中国はロシア文学を広く深く受容したが、先行研究ではロシア十月革命の影響とマルクス主義の伝播を起因とする革命文学および「人道主義」の摂取という点が指摘されるにとどまっていた。本論文は、大文化人の魯迅(ろじん、1881-1936)、周作人(しゅうさくじん、1885-1967)兄弟と思想家、文学者にして中国共産党指導者でもあった李大釗(りたいしょう、1889-1927)、瞿秋白(くしゅうはく、1899-1935)を中心とする近代中国知識人におけるトルストイ、ドストエフスキー、アルツィバーシェフ、ゴーリキーの受容を、同時代世界文化史の視点から論じたものである。

第一章は、辛亥革命(1911)後の李大釗が中里介石のトルストイズムに触発され、倫理・道徳革命という「個人」の確立による平和世界実現を「人道主義」としてとらえ、「積極的・肯定的なナロードニキ的心情」を受容していく過程を論証した。

第二章は、ドストエフスキーを当初には人類主義として受容する傾向も示していた五四時期文化人が、五四運動(1919)における政治的「大衆」の台頭を背景に、「下層階級の人々」に同情を寄せた「人道主義」作家という革命性に重点を置く読みへと転換していく過程を論じた。第三章は、ドストエフスキーをめぐって20年代末以降のマルクス主義的観点の評価(当初は肯定的、30年代以降は否定的)が現れ、30年代には日本の文芸復興の影響で多様なドストエフスキー論が流入する中で、魯迅が独自にドストエフスキーを深く理解した点を分析した。第四章は、魯迅における「個人主義」変容による「復讐」の情念の発生過程に際するアルツィバーシェフ『労働者シェヴィリョフ』の受容が、革命運動における自我の問題、すなわち「挫折したナロードニキ的心情の受容」である点を明らかにした。

第五、六章は、五四期世代の代表である瞿秋白における生命主義を検討し、「個人」の確立を渴望した彼が、未来志向による自己と社会との統一という未来先取的な発想により自我を確立し、社会運動に関わるためロシアに向かった点、そして中国の変革運動に関わるために第一革命後の新タイプ知識人として「反小市民主義」のゴーリキーを受容し、その受容が旧式知識人の滅亡を見据えて大衆に投じるという自己破壊的な衝動に支えられたものであった点を分析した。第七章は中共党内闘争により失脚した瞿が、非革命的な『クリム・サムギンの生涯』を書いて革命運動に関わったゴーリキーを再受容して革命的知識人アイデンティティを再確立し、「作家」となった点を論証した。

本論文はゴーリキーのロシア語テキストも参照しつつ、①五四期中国知識人がロシア文学に共感を寄せる際には、1905年第一革命期文学を焦点化していたこと、②それは中国知識人が「大衆」勃興の新時代において自己の社会的存在意義をロシア思想・文学に見出していたためであること、③そこには革命指向の積極的心情と、革命運動挫折の消極的心情という二傾向が存在することなどを明らかにした。一部の論理の枠組やモダニズムなどの定義が曖昧ではあるが、①②③の三点を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。